

ある官僚の死

Death of a Government official

田村 元彦

カート・ヴォネガットの小説の名文句に「愛は負けても、親切は勝つ」(Love will fail, but courtesy will prevail.) というのがあるが、ヴォネガットは別のところで、ただし善が悪に勝つためには「天使がマフィアなみに組織化される必要がある」とも述べている(『国のない男』)。

2013年5月15日から27日にかけて行われた「水俣・福岡展」(西南学院大学も協賛)のイベントとして、同年4月21日にJR九州ホールで開催された第13回水俣病記念講演会において、石牟礼道子さんが「まなざしだけでも患者さんに」という講演を行った。ちなみに石牟礼さんの『苦海浄土』は、2012年に大学で講演していただいた作家の池澤夏樹さんが個人編集された世界文学全集(河出書房新社)において、日本の長編小説で唯一世界文学として選ばれた作品である。石牟礼さんの言葉をできるだけ省略せずに引用しておきたい。

《みなさま、ようこそおいで下さいました。ありがとうございます。

もう、五七年でしょうか(公式確認から)。

お一人、患者さんがおられるお家の中に行ってみますと、お一人ではなくて、認定申請をなさったり申請が通ったりなさるお家には、必ず、ご兄弟の方、おじいちゃんやおばあちゃん、三代くらい患者さんがいらっしゃると思ってほぼ間違いはない。

それは、みなさん地域社会に大変遠慮をなさいまして、一軒の家から一人のり出るのも心苦しいのに、まだあとにも兄弟がおります、子供がおります、おじいちゃんやおばあちゃんも、病み伏しております。そうおっしゃるのがとてもお辛いので、一人にしとこうとお思いになって。

お一人ではないんです、一軒のお家からお一人のり出られても、それを行政は全然察することができない。察しても聞かないふりをしておりまして、五七、八年というのも違うんですね。みんなが知らない、数の内に数える前に、人間ではないような声を出して苦しまれて。

わたくしの家は、まあ家族もわたくしがこんな所でお話するのを今日初めて見たと思うんですけど、わたくしの家は水俣川の川口にございまして、川口というのは海の潮も来るところで、その一番下流にある水俣大橋の袂に避病院がございました。避病院というのはご存知のように、伝染病にかかった方たちが収容される病院でございまして、そこに最初の内はあまりにひどい方々が収容されたんです。それで昼となく夜となく、呻き声を出される。そのお声が人間ではないようなお声で。家族の方が、わが生んだ子とも思えんような呻き声。それからベッドに寝かせておくと、手足を縛りつけておいても、あまりの苦しさに天に向って、こう、ギリギリ、ギリギリ、舞いなさる。それでベッドの上に縛ってある紐やら帯やらがちぎれて下に落ちなさる。

ちょうどそのころ、息子が結核になって水俣市立病院の結核病棟に入りましたので看病に行きますと、隣に新しい病棟ができて、奇病病棟と言っておりましたけれど、そこからも呻き声が聞こえてまいりました。今でも思い出しますが、何かにつかまろうとして、こう、爪の跡が、真新しい奇病病棟の壁に真新しい爪の跡がついているんです。

夏は戸を開けてありますから、その前を通りかかると、目が合いそうになりますのでお辞儀をいたしますと、お辞儀を返して下さる方もいらっしゃいますが、胸の上に乗せておかれた漫画本のような、週刊誌のようなものを、人が通るとぱっと立てなさる。つまり他人にお顔を見られたくない、そういうことをなさる方もいらっしゃいました。そうして亡くなられて、火葬場につれていかれるんですが。

わたくしの部落には避病院の先に火葬場がございました。わたくしの小さい時は水俣の町の方に住んでおりましたけれども、お葬式を見かけますとあまりよく存じない方でも、道を通る方たちは立ち止まって合掌しておりました。でも、その避病院で亡くなって火葬場に送られる方たちは、どこのどなた様だか分からないのでございます。

それでもそこらの畑で鋤どりをしていた方たちが、「ああ、どこの仏様じゃろうか。避病院に来て死んなはったばいな」と言い合って、一人で鋤をやっていた方も鋤を置いて死人さんに向って合掌なさって、でも誰もお葬列に加わらない。畑のあちこちにいる見知らぬ方たちからお見送りを受けてあの世に行かれました。そういう時代が続きました。

生きているときも、五〇数年水俣病を抱えた一家がどのように苦しい思いをしてこられたことか。行政の長、長だけではありませんが、一分でも一秒でも考えてみたら分かると思うんですけども。窓の外からご挨拶してもご自分を隠したい、そういう方

のお苦しみ。一言もご自分の思いを語れない、箸も握れない。そういう方々のお心の中を思いやる情け、情けがあれば思いやってよさそうなものですが、思いやつてもらえない。

人は何のために生きるのか。どういう関係であれ、人様との絆、心の絆をもてたときに、人間は生きているという喜びがあるのではないのでしょうか。それなのに苦しいともうれしいとも一言も言えない。何か尋ねたいことがあっても、こんなはずではなかったと思っても言葉を交わすことができないということがどんなにお寂しいことか。

わたくしは文章を書いておりますから、そういう状況の水俣をいろいろ訴えてまいりましたけれども、受けとって下さって、見も知らぬ方々のお世話になってきました。長い間、よくお世話をして下さいました。この場をお借りして、ご縁のあった方々にも、ご縁のなかった方々にも、わたくしはお礼を、お礼を申し上げる資格はないのでございますけれども、高い所からではありますが、お礼を申し上げたいと思います。本当に長い間お世話になっております。

でもまだ解決いたしておりません。今生きて苦しんでいる方たちの息が切れそうなときに、まなごしだけでいいのです。言葉でなくても、目で、そのまなごしで、私たちのことを思っていて下さると患者さんに思っていたいただければ。》

（「水俣フォーラム NEWS」第37号（2013年11月8日）6～9頁。石牟礼さんの詩「幻のえにし」は3～5頁に収録。）

しかし、その非人間性を酷評された「行政」の中に例外ともいえる存在がいた。山内豊徳（やまのうち とよのり）。元環境庁企画調整局局長。没年1990年12月5日。享年53歳。出身は福岡県。「1949年4月 私立西南学院中学に入学。西南学院がプロテスタント系の学校だったこともあり、『聖書』を愛読。「牧師さん」とあだ名をつけられる。1952年3月 同校卒業」とある。つまり、西南学院出身。

彼の年譜を掲載しておきたい。（山内豊徳『福祉の国のアリス』（八重岳書房、1992年）の年譜と是枝裕和『しかし… ある福祉高級官僚 死への軌跡』（あけび書房、1992年）を基に作成した。）

山内氏の存在については、彼が死を選んだ1990年に新聞等の報道で知ったはずであるが、ずっと忘却の彼方だったというのが正直なところである。改めて認識したのは、是枝裕和監督のTVドキュメンタリーによってであるが、山内氏が西南学院出身で

あったことに気づいたのは、その映像作品を書籍化した『しかし… ある福祉高級官僚 死への軌跡』（あけび書房、1992年）を2013年の「水俣・福岡展」がらみではじめて手にして読んだ時であった。この本は『官僚はなぜ死を選んだのか 現実と理想の間』（日経ビジネス人文庫、2001年）として文庫化されている。また、2014年の春には再文庫化が予定されており、解説は想田和弘監督である。この再文庫化を記念して、是枝監督を大学にお招きし、山内氏や本学OBのTVドキュメンタリスト木村栄文氏についてお話をうかがう予定である。（ちなみに監督の『空気人形』（2009年）の原作漫画『ゴダ哲学堂 空気人形』（小学館）の作者は、本学法学部中退の業田良家氏である。）

以下、是枝監督のTVドキュメンタリー「しかし… ～福祉切り捨ての時代に～」（1991年3月12日放送。フジテレビNONFIX。47分。制作：テレビマンユニオン。ディレクター・構成・プロデューサー：是枝裕和）の内容を紹介しておくことにする。これは監督が第42回水俣セミナー「是枝裕和監督とドキュメンタリー作品「しかし…」を観る」（2002年3月20日）で作品を上映され、講話された際に配布された資料に基づいている。

《1988年12月31日、東京・荒川区のアパートに住む元ホステスの女性が焼身自殺した。彼女は10年前に突然襲い掛かった難病のために生活に困窮し、生活保護に頼っていた。その彼女に対し担当するケースワーカーは「金を世話してくれる男がいるだろう」と疑い、また彼女が入院していた病院に押しかけ、医師の「良くなれば働くことは可能」という言葉を「働けると言ったぞ」と誇張して突きつけ、部屋代に関する保護申請を取り下げさせ、家賃のより安いアパートへの移転を迫った。そして、通常なら支払われるはずの年越しのための一時金がなかなか支払われない中、彼女は自室に灯油を撒き、火を放った。

1990年12月5日、水俣病和解交渉の国側の責任者だった環境庁のエリート官僚が自殺した。山内豊徳53歳。その年の9月28日には東京地裁で、続いて10月2日には熊本地裁で水俣病訴訟について和解勧告が出された。被告である熊本県と汚染物質を排出していた企業であるチッソが和解勧告を受け入れる態度を示したのに対し、国は和解を拒否していた。環境庁企画調整局長であった彼は、和解拒否の立場を弁明する国側の責任者として、患者やマスコミの批判の矢面に立たされていた。環境庁長官北川石松は、東京で「水俣病問題の早期解決を願う会」の陳情を受けた後、水俣病患者連盟

■ 山内豊徳 年譜

西暦	年号	年齢	事項
1937	昭和12	0	1 / 9 福岡市野間にて、父・豊磨、母・壽子の長男として誕生。 父は職業軍人。幼時、東京・中野で育つが、壽子の豊磨との別居に伴い、母子で福岡市多賀福海町（現在南区多賀）へ移る。
1943	昭和18	6	4月 福岡市高宮国民学校に入学。 8月 父・豊磨（陸軍少佐）、東京から広島市へ転任。
1944	昭和19	7	母親から離され、父方の叔母に連れられて広島へ転居。 6 / 3 父、中国出征に伴って祖父母の住んでいた福岡市堀川町（現在南区大楠）へ転居。福岡市春吉小学校へ転入。
1946	昭和21	9	4 / 21 父、上海で戦病死（陸軍中佐として勲三等を授く）。 豊徳は、祖父・豊太の儒教主義に基づく厳しい教育を受けながら少年時代を送る。この頃、詩作を始める。三好達治に傾倒する。
1949	昭和24	12	4月 私立西南学院中学に入学。西南学院がプロテスタント系の学校だったこともあり、『聖書』を愛読。「牧師さん」とあだ名をつけられる。
1952	昭和27	15	骨髄炎にかかり、片足やや不自由に。 3月 同校卒業。 4月 福岡県立修猷館高校入学。在学中は詩作に没頭する。
1955	昭和30	18	2 / 24 祖父・豊太没。 3月 同校卒業。成績優秀者に送られる修猷館賞を受賞。 4月 東京大学教養学部文科1類に入学。上京。 世田谷区代田に下宿、作家を志す。 東京大学学生新聞が設けた「五月祭賞」に毎年応募を繰り返す。
1959	昭和34	22	3月 東京大学法学部（第2類公法コース）卒業。 4 / 1 厚生省入省（上級公務員試験の成績は99人中2番目）。 医務局総務課に配属される。
1961	昭和36	24	12月 社会局更生課へ（身体障害者の保護更生に携わる）。
1963	昭和38	26	8月 社会局保護課へ（生活保護行政に携わる）。
1966	昭和41	29	8月 環境衛生局環境衛生課へ。 公害課の課長補佐を兼任、橋本道夫公害課長（後に環境庁大気保全局長）ら共に公害対策基本法作りに取り組む。 12 / 28 厚生省の上司・新谷鐵郎氏宅で、高橋知子とお見合い。
1968	昭和43	31	3 / 10 知子の実家のある静岡県沼津市で挙式、結婚（知子26歳）。 5 / 1 厚生省から埼玉県民生部福祉課へ出向、福祉課長として、老人福祉障害者福祉へ積極的に取り組む。
1969	昭和44	32	6 / 19 長女・知香子誕生。
1970	昭和45	33	10 / 1 埼玉県が同和对策室新設、室長を兼ねる。
1971	昭和46	34	5 / 1 厚生省へ帰任。年金局年金課へ課長補佐として配属。 世田谷区上用賀の公務員住宅に転居。 7 / 1 環境庁発足。
1972	昭和47	35	4 / 27 次女・美香子誕生。
1973	昭和48	36	7 / 27 厚生大臣秘書官事務取扱に就任。この年、大臣に陳情に来た「てんかん協会」の松友了氏と出会う。
1974	昭和49	37	6 / 11 年金局資金課長に就任。

西暦	年号	年齢	事項
1975	昭和50	38	5/6 児童家庭局障害福祉課長に就任。 「てんかん」という病気は精神病扱いのため福祉の対象にされていなかった。 山内は自ら会員となり、立場を超えて「てんかん協会」に個人的に協力する。
1977	昭和52	40	8/23 社会局施設課長に就任。
1979	昭和54	42	1/23 社会局保護課長に就任。生活保護行政に再び携わる。 7/6 環境衛生局企画課長に就任。 9月 福祉行政への考察をまとめた『明日の社会福祉施設を考えるための20章』が、中央法規出版から出版される。
1980	昭和55	43	10月 福祉新聞にアリス・ヨハンソンの名で『福祉の国のアリス』連載を開始。連載は好評で、97回丸2年続けられた。
1981	昭和56	44	8/26 医務局総務課長に就任。
1982	昭和57	45	8/27 大臣官房人事課長に就任。
1984	昭和59	47	2/8 母・壽子、福岡県粕屋郡古賀町で死去。
1985	昭和60	48	7月 中央法規出版より『福祉のしごとを考える』出版。 9月 大臣官房審議官（年金担当）に就任。
1986	昭和61	49	9/5 厚生省から環境庁へ転出、長官官房長に就任。
1987	昭和62	50	3/29 町田市薬剤師に転居。 9/25 自然保護局長に就任。沖縄県石垣島白保の新空港建設問題、長良川河口堰建設問題に取り組む。
1990	平成2	53	2月 北川石松氏が環境庁長官に就任。 7/10 企画調整局長に就任。地球環境問題に取り組む。 8/27 気候変動に関する政府間パネル（IPCC）第4回全体会合に首席代表として参加（～8/30、スウェーデン） 9/28 水俣病東京訴訟について訴訟東京地裁が和解勧告。 10月 『地球温暖化防止計画』をまとめる。 水俣病訴訟に対して、裁判所から出された和解勧告の対応に追われる。 11/28 北川長官の水俣現地視察決定（12/5、6）。 12/5 自宅の2階で縊死。享年53歳。正四位勲三等旭日中綬章を授く。

委員長の川本輝夫から出た「水俣に来て下さいよ」という発言に促され、水俣へ行く決意を固めた。環境庁の事務当局は北川が水俣で患者と対話するのを阻止すべく水面下でさまざまな画策を試みるが、いずれも失敗。そして北川が水俣に出発したこの日、山内は自宅で自ら命を絶った。

生きるために「福祉」にすがったものの、その「福祉」に踏みにじられた一人の生活保護受給者と、「福祉」の理想を掲げ厚生省に入省し、地位が上がっていくに従い「福祉」の限界にぶつかり、そして敗れていった一人の官僚。福祉の両端に生きた二人の生と死の軌跡を辿りながら、人と人、人と制度の関係性を問う。（1991年ギャラクシー優秀賞受賞）

山内氏と彼の死への軌跡については、この是枝氏の著作や佐高信『官僚たちの志（こころざし）と死』（講談社、1996年）所収の「自殺を選びし者」（7～79頁）に詳しい。また、多くの有名人の遺書を読み解いた狩山恵一『遺書学』（文芸社、2011年）においても山内氏は「信念に勤めた男」と評され、ページが割かれており、簡便な記述であるため、引用しておきたい（106～109頁）。

《（1956年の）水俣病発生の確認以来、患者は補償や救済を求めて長い年月をかけて国と争うこととなる。そして90年12月、水俣病和解訴訟の国側の責任者だった環境庁のエリート官僚が自殺した。

山内豊徳、53歳であった。

山内は1937年1月9日、福岡県福岡市に生まれた。7歳のときに母と離別し、父は出征して中国戦線に送られた。幼い彼は祖父母に引き取られる。父はそのまま上海で戦病死した。

終戦後、15歳で骨髄炎を患う。治癒後もしばらくは後遺症に苦しめられ、足を引きずって歩いた。

59年、東大法学部を卒業し、厚生省に入省。上級国家公務員試験で99人中2番という成績を取めた。入省後は医務局総務課を振り出しに福祉の向上に取り組み、身体障害者の保護や支援、生活保護などの問題を手がけた。公害問題に従事するようになってからは、後に成立する公害対策基本法を起案している。また、日本てんかん協会の設立に協力するなど、当時は精神病とされて福祉の対象外だった「てんかん」患者の支援にも取り組んだ。

86年、厚生省から環境庁官房長に転出。そこでは長良川河口堰問題、石垣島白保新空港問題など自然保護問題に取り組んだ。水俣病認定訴訟に出会ったのはこのころである。

熊本水俣病患者の発生は1960年に終わったというのが厚生省の見解であり、原因企業と被害者の間で59年12月に和解が成立しているとして、水俣病問題は既に終結したとの立場をとっていた。したがって国は水俣病発生の責任を認めず、原告との裁判がその後も続いた。90年には裁判所からの和解勧告が出されたが、国はこれを拒否し、和解に転じるのは96年のことである。このとき、国側の代表として原告と対峙していたのが、環境庁企画調整局局長・山内豊徳であった。入省以来、一貫して弱者の側に立ってきた彼が、皮肉にも弱者と対立するポジションに立たされたのである。



3月3日に西南コミュニティーセンターで講演した
映画監督の是枝裕和氏（2014年3月7日付毎日新聞）

国による和解拒否はマスコミの格好の餌食となった。まるで国が水俣病患者を切り捨てているかのような恣意的な報道を繰り返し、世論を誘導した。なぜ国は受け入れを拒絶するのかと国民は激高した。批判の矢面に立たされたのが山内である。

「水俣の仕事はどうしてもやりたくなかった。自分にうそをつかなくゃいけない部分が多すぎるんだ……」

山内は家族を食卓に呼び、役所を辞める覚悟と事情をぼつぼつと話し出した。「お父さんはやりたくない仕事には向かえないんだ。お父さんは正しいと信じていることをやっているつもりだけど、もし役所をやめたら何して食べていこうか」

旧厚生省では一貫して福祉の現場に携わり、公害対策基本法制定にも尽力した。長年にわたり福祉行政に取り組んできた彼にとって、常に被害者が切り捨てられてきた水俣病の現実には耐えられなかった。

もちろん他の官僚たちに良心がなかったわけではない。しかし、組織として動く以上、個人の思いを貫き続けることはたやすくはない。山内は人としての良心と、官僚としての責任の狭間で悩み、とうとう彼自身が二つに引き裂かれてしまった。

「官僚に徹しきれなかったのね……」

葬儀の席でそう呟いたのは、自民党代議士・森山真弓である。山内は高級官僚にありがちな尊大さは微塵もなく、温厚で誠実な人柄だったらしい。不遇な人々のために尽くそうという志を持ち、厚生省に入ったキャリア官僚。そんな彼だからこそ、悩み、苦しみ、自ら死を選ぶ結果となってしまった。

遺書の中には「しかし…しかし…何度もつぶやいてみるがあのがやかしい意欲、あのはれやかな情熱はもう消えてしまった」と書かれている。志を持って入省し、長年人々のためと思ってやってきた仕事が、今まさに、人々を苦しめている。彼の中で何かが変わった瞬間であった。

山内は、高級官僚として華やかな道を歩んだ。しかし、官僚であると同時に、純粋な一人の人間であろうとした。そのことが、結果的に彼自身の人生を険しくしてしまった。彼は小さいころに両親を失い、重い病気と闘った。そんな環境で育った彼だからこそ、弱者の気持ちが理解でき、弱者とともに生きようとしたのだろう。人のために生きようとした彼が、あと少しだけ自分のために生きようとしたなら、結果は変わっていたのかもしれない。》

山内氏がなぜ死を選んだのかについての詮索や謎解きめいたものは、実は、本稿の目的とするものではない。本稿の概略について講話をした2014年1月9日の大学チャペルの際にそのことを改めて強く意識した。

百田尚樹氏の原作小説とはやや感触が異なるヒューマンドラマとなっていた映画『永遠の0』において、岡田准一演じる主人公の内面は永遠に解き難い謎、いわばゼロ記号であり（だから永遠のゼロ！）、彼（もの言わぬ死者）をめぐる「生き残った者」たちの語りこそがメインであったように（特に映画公開前に亡くなられた夏八木勲氏が心のこもった演技をされていた。セリフがすべて夏八木さんご自身の遺言のように聞こえてきた）、山内氏の死もまた永遠に解き難いものであるし、わかった気になって片付けてしまってはならないと考える。

最後に、是枝監督の著書から、山内氏とキリスト教に関わる箇所を引いておくことにする（『官僚はなぜ死を選んだのか』203～204頁）。

《ある晩、知子が夜中にふと眼をさますと、台所のほうに人の気配がする。気になって行ってみると夫だった。夫は食卓に隣接した書棚の前で聖書を開いていた。

「どうしたの……」

知子がたずねると、

「うん……『汝の少（わか）き日に汝の造主（つくりぬし）を覚えよ』は何の書だったかなあ……」

夫はそう言った。

山内は聖書の中のこの一節が気に入っていて、赤鉛筆でラインを引いてあったが、夜中に急に気になって2階から降りてきたらしい。

「『伝道の書』の第12節ですよ」

そう言って、知子はその部分を開いてみせた。

汝の少き日に汝の造主を覚えよ。即ち悪き日の来り年のよりて我は早何も樂むところ無しと言（いふ）にいたらざる先、また日や光明や月や星の暗くならざる先、雨の後に雲の返らざる中に汝然（しか）せよ

「これは口語訳と文語訳と随分違うのよね」

知子は、そう言って2冊の聖書を比べて夫に見せた。

夫はそんな知子の説明を黙って聞いていた。

この部分は口語訳では次のようになっている。

あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わがわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。太陽と光、月と星とが暗くなり、雨の後にまた雨雲がおおう前に。》

付 記

本稿で予告しておいた是枝裕和監督の講演は、3月3日に実施され無事に終了した。講演については活字化し、共同研究「TVドキュメンタリスト木村栄文の軌跡」の報告書に掲載予定である。

以下は、大学HP等に掲載した当日の報告である（文責：田村）。

<http://www.seinan-gu.ac.jp/news/3473.html>

映画監督の是枝裕和氏の作品上映&講演会を開催しました

2014年3月3日、西南コミュニティーセンターにて、日本を代表する映画監督で「誰も知らない」や最新作「そして父になる」などで知られる是枝裕和氏をお迎えし、作品上映&講演会を開催しました。学生、一般市民など150名を超える方が参加しました。

本講演会は、西南学院大学・RKB毎日放送共同研究「TVドキュメンタリスト木村栄文の軌跡」（研究代表：田村元彦法学部准教授）主催によるもので、是枝氏が映画監督になる前に制作したTVドキュメンタリー『しかし…～福祉切り捨ての時代に～』（1991年、フジテレビNONFIX）を上映した後、この作品でとりあげた山内豊徳氏の生の軌跡や当時の取材の経緯のほか、ご自身の若き日の思い出などについて、是枝監督らしい魅力あふれる語り口で講演がなされました。

今回の企画は、このドキュメンタリーを書籍として著した「しかし…ある福祉高級官僚 死への軌跡」（1992年、あけび書房）を2001年に文庫化したものを、PHP研究所から『雲は答えなかった―高級官僚 その生と死』というタイトルで再文庫化されたことの記念でもありました。上映後のサイン会では長蛇の列ができ、丁寧にサインしていただき、会場で販売された書籍は完売しました。

上映作品、そして著書に登場する高級官僚は、90年当時、厚生省から環境庁に出向し水俣病訴訟の担当者として矢面に立っていた山内豊徳（やまのうち・とよのり）氏で、西南学院中学校の卒業生です。また、是枝監督と同じくTVドキュメンタリーの世界で活躍したRKB毎日放送の故木村栄文氏も西南学院大学の卒業生（59年卒・商商）で、栄文さんについては是枝監督は、「RKB毎日放送といえば木村栄文を思い浮かべる、そんな存在は稀有なもの。栄文さんの作品で好きなのは「あいラブ優ちゃん」。『ドキュメンタリーは創作である』という栄文さんの言葉にシンパシーを感じる」と述べられました。

最後に是枝監督は「今日の上映作品が私の原点。ドキュメンタリーを制作していると思いつきにならない局面が必ずある。むしろ、それがないといけない。思いつきにならなかったものをいかに再構築できるか。撮ることで考え、自分の考えが深まり、そして番組が生み出されていく」と語り、会場に集まった聴衆の大きくうなずく姿が見られました。